

令和 6 年度 第3回 静岡県立静岡城北高等学校 運営協議会議事録

日時 令和 7 年 2 月 6 日(木)

出席者 学校運営協議会委員

大高千尋（同窓会関係者）

河原正哉（企業関係者）

小池理恵（学識経験者）

杉山 誠（地域関係者）

武田光貴（PTA 会長）

静岡城北高等学校

校長 渡辺賢一

副校長 石原 忍

教頭 山田光俊

事務長 大坪淳子

《次第》

1 開会

2 校長挨拶

渡辺校長から、11月以降の本校生徒の様子、インフルエンザの全国的な流行、修学旅行、海外異文化体験研修、大学共通テスト等の報告があった。

3 学校の概況

山田教頭から、11～1月の部活動結果、新聞記事等のトピックの説明があった。

4 令和6年度学校経営計画書の評価について

(1) 山田教頭から、令和 6 年度学校経営計画報告書の説明があった。

(2) 各委員からの感想

・「生徒を承認し励ますボイスシャワー」とあるが、以前具体的な声掛けの内容については検討中とのことであった。どんな場面でどのような声掛けが有効と考えるのか。

（回答）

・主体性を育成する場を設定することが重要であり、その際に生徒が失敗を恐れずに挑戦するよう、後押しする声掛けが大事である。例えば生徒が質問とずれた回答をした際には、「違う」とは言わず、「なるほど新しい視点だ」のように答えている。生徒の発言や行動の良いところを見つけて声掛けする教員が増えている。授業や面談を通し、多くの教員が小さなことでも見逃さず肯定的な声掛けを行っている。

・グラウンドデザインの先生方への落とし込みはどのように行っているのか。

（回答）

・職員会議等で、各分掌から企画を提案する際に、育成を目指す 5 つの力のうちで、どの力の育成を意図しているのか提示することになっている。静岡県「行きたい学校づくり推進事業」指定を受けているが、成果指標として育成を目指す 5 つの力を用い、職員研修を通して教職員への浸透を図っている。

・達成状況が、昨年度と比べて下がっている項目がある。経営計画に PDCA のアクションがない。課題に対する取組方法など、具体的な行動目標を設定するとよい。先生方がグランドデザインに従い、原点に返って熱心にやっていたとよい。

・目標設定は、先生方主体であるならば 100%であるべきではないか。課題に対して生徒と先生方が一体となって取り組む雰囲気を作ると、すごくよくなると思う。

・評価は、個別評価と総合評価で書くと、評価の現れも違ってくるだろう。

・日本人はもともと自己肯定感が低いので、例えば「挨拶」をどう定義するのかによって評価も変わる。場面によっては会釈でもよいなど、評価に際して、生徒に丁寧な説明があるとよい。

・町内行事に参加する人が大人も学生も減っている。ボランティアや PTA の存続が危ぶまれ、地域行事への参加意識を高めることが求められる。高校生にも主体性をはぐくみ、地域行事などのボランティアへも積極的に参加してほしい。

・ボランティアは人とつながる良い機会であり、経験値も高まるが、単なる義務感で行われると継続しづらく、一度きりで終わることが多い。

・親世代も含めて人との関わりを面倒に感じる傾向があり、積極的に関わる時間を増やすことが必要。特にコロナ禍の影響で交流が減少し、人とのつながりを意識的に取り戻すことが求められる。

・学校ごとの特色を生かしながら、対面での他校との交流を増やすことで、新たな刺激や学びが生まれる。先生が場を提供しても生徒が積極的に関わらないことが課題で、参加意識の向上が必要。

・被災時には高校生の力が必要となる。積極的に防災に関わってほしい。

5 令和7年度に向けて

校長から、「令和7年度に向けて」の説明があった。

・学校経営計画書の数値目標には現実的に達成が厳しいものがある。評価やデータの整理を進める中で、不要な要素を省きつつ、実態に即した改善が求められる。

・令和 7 年度から、一部の県立高校と特別支援学校で、総務事務を集約化して事務職員が校務運営に参画する県の事業のモデルを試験導入し、令和 8 年から本格実施する予定であり、来年度本校がモデル校となった。教職員の長時間勤務を是正し、教育の質を向上させるために、業務内容の見直しや ICT の活用、校務分担の効率化が進められている。その過程で課題を整理し、円滑な導入を目指していく。保護者や地域との協働も引き続き重要視されている。

・本校では、全教職員で、「やめる、へらす、かえる」の観点から、より効率的な業務改善に取り組んでいる。

6 情報交換

・グローバル科の取組が普通科にも波及し、良い効果を与えている。

・同窓会としても、講師紹介など探究活動の支援をしていければと考えている。

・グローバル科のある学校として、留学生をもっと活用するとよい。留学生の学校間の交流も可能であり、国内でもグローバル活動が可能である。文化祭等での留学生との交流も可能である。

・「誰のため」、「何のため」を明確にして、「こうすれば理想が実現できる」ということを明確にするとよい。

・生徒たちが、広く興味関心の種を見つけて、自主的に探究につなげていけるとよい。

・大学のリソースが必要な時は、お声掛けいただければ探究活動の支援が可能である。

7 閉会